

『共有されたキャンバス』

～人生の台本についての考察～

私たちは白紙の羊皮紙として生まれる——
時を超え、数えきれない手によって形作られ、
偶然や選択、そして強欲や怒り、汚れといった筆致によって彩られていく。

私たちの人生は、柔らかなスケッチとして始まる。
あり得る未来の淡い輪郭だ。
状況が紙やすりのように私たちを削り、

溝や傷、隆起を刻みつけていくにつれて、ゆっくりと質感が生まれる。
やがて私たちは「これが私だ」と思うようになる。
ある時には、鮮やかな筆致で描き、

混沌を、かすかな優雅さがきらめく渦巻くパターンへと変えてゆく。

しかし、またある時、私たちはイーゼルの前で立ち尽くす。

心は疑念で重く、筆は震え、
そもそも自分に創造する力があるのかと疑ってしまう。

芸術のように生きるには、勇気が必要だ。
自分の過ちを受け入れる大胆さが求められる。

さらに、何を残し、何を塗り替えるべきかを知る知恵も必要だ。

そして常に、ユーモアが不可欠である。

私たちは自分の小さなキャンバスを、つい真剣に考えすぎてしまう。
しかし実際には、
私たちは自分の汚れた状態を愛することを学ばなければならない。

なぜなら、それらはやがて宇宙のキャンバスと溶け合い、
存在という魔法のようなエントロピーと一体になるからである。





玲亜: (身を乗り出し、眉を上げ、目にいたずらっぽい光を浮かべながら) 教えて、私たちは自分の人生を自分で書いているのか、それとも誰かの物語の登場人物に過ぎないのかしら？

ティム: (息を吐きながら、カップを回し、口元に少し微笑みを浮かべる) 「共著」というのが、一番しっくりくる 答えだと思う。僕たちの人生を綴るインクの一部は、見えない作者たちからきている。先祖、集合的なカルマ、僕たちが受け継いだ文化、そういうものだ。僕たちのインクは、歴史の千本のペンから流れている。

ティン: (テーブルに円を描きながら、声は静かで落ち着いている) 自己とはキャンパスではなく、鏡なのよ。いわゆる「選択」の一つ一つは、市場や家族、そして私たちの地球から植え付けられた深いニーズを反映している。 私たちは自分の輪郭を描いていると思っているけど、実際には、私たちに触れたすべての人の筆跡でできた共有のコラージュの中に存在しているってわけ。自由意志って、とてつもなく強力な幻想だね。

ミン: (時計にちらっと目をやる。秒針が着実に、冷酷に時を刻む音がする) そして、この議論こそ美しい不条理そのものだ。フアニータが言う通り、決定論が支配している。エントロピーだけが真の作者で、僕たちの避けられない

玲亜: (かすかに微笑みながら、ジャックと目が合い、挑戦的に) 多分、それがポイントなんじゃない？

- T Newfields (和訳: テレサさん、みーね、NekoJara-City 11、本腰、みーね、とSnowy)

開始: 1970年 ペンシルベニア州のニュータウン市 完成: 2026年 静岡市